

ニヒリズムと思考の転回

—— 教育的世界の存在論的考察への序説 ——

和田 修 二

I

普通、教育 *Erziehung* というとき、我々は「成熟したものが、成熟しつつあるものの精神生活を形成する計画的活動 *planmässige Tätigkeit*」を考える。学校に於ける教授活動 *Unterricht* は、この意味での教育を直接の目的とするものであるが、職場に於ける上司と下僚、教会に於ける僧侶と信徒、家庭に於ける夫婦、親子の関係等にあっても、副次的に何らかの教育が行われているとみることができるから、その限り「生活それ自体が人間を教育する」ということもできる。

更に、人間としての完全性 *Vollkommenheit* の十全な展開と形成が、従って「人間をして真に人間たらしめる」ことが陶冶 *Bildung* であり、陶冶を結果する活動が教育であるとみるなら、教育こそあらゆる人間的営為、即ち政治的、経済的、文化的諸活動、諸制度の究極の帰着点として、まさに「最高の実践的目標 *das höchste praktische Ziel*」である¹⁾。しかも、人間の形成をひき起すものは、独り生きた人間の働きかけにとどまらない。時として、それは自然であり、歴史的な事件であり、天啓 *Offenbarung* である。総じて、存在する限りの一切のものが、生きた聯関をなして、我々の形成に何らかの関わりをもつ。教育の場は、時間空間に拮った生の聯関 *Zusammenhang des Lebens* としての歴史的世界である。

万象が自己との生きた連帯に入るということは、対象が一個の独立した意志統一体 *Willenseinheit*・「汝」として「我」に向って姿を現すこと、換言すれば、意志と衝動 *Wille, Impulse* に対する抵抗と阻止 *Widerstand, Hemmung* の緊張感、作用聯関 *Wirkungszusammenhang* の体験の中で、他と出会うということである²⁾。出会う *begegnen* とは、自他が共に一つの地平 *Horizont*・「世界」に出で立つことであり、一つの時を形成すること、「同時性 *Gleichzeitigkeit*」に立つことである。同時性は時の流れの停止・エポックへ *Epoche* であり、エポックへがなされるところに時代 *Zeitalter, Periode* が生じ、歴史が成立する。歴史的世界の実在性は、我と汝の交渉の中にある。我の汝に対する意志と衝動を通じて世界と歴史が限定され、逆に世界と歴史が汝の意志を通じて我を限定するのである。

生の聯関としてみられた歴史的世界は、それ故、多様な我と汝の相互限定の場であり、多数の特殊な意欲と行動が、それぞれ一個の全体となり普遍たろうとして、世界を目指し時代を劃す

注 1) Dilthey : *Gesammelte Schriften* VI. S. 69—70

2) Dilthey : *Gesammelte Schriften* V. S. 130—135

るところ、即ち「諸世界の世界」であり、「諸時代の時代」である。歴史的世界は、従って、その中に多数の中心をもち、この中心相互のダイナミックな交渉、成長と没落の過程を通じて自らを展開する。それは終ることなき流動であり、個性的なものから個性的なものへの非連続的連続である。何人も生の聯関全体を見渡すことは出来ないし、世界歴史の行方を確定し尽すことはできない。ただ、エポッヘに於いてその都度の地平を開き、そこに現れる汝を通して、生の姿と傾向を了解 *Verstehen* する外ないのである³⁾。

我々は、このような歴史的世界の中にある。従って、人間が人間となるということは、歴史的世界内存在となることである。そして、歴史的世界は、エポッヘ・独自の個性をもつ時代と社会として現存するから、このことは第一に、彼が運命的所与としての汝、即ち彼の所属する時代や社会の一員となること、そこでの生の様式、規範を受容することである。この意味に於いて、教育は常に一つの「方法的社会化」⁴⁾であり、それぞれの時代や社会が、自己を維持する同化の機能である。しかしエポッヘ・停止は、古きものとの断絶、新しきものの出現を意味するから、歴史的世界内存在となることは、同時に、伝統的な汝に対して「否」を云う創造的な我の形成でもある。この意味に於いて、教育はその時代と社会の更新、再組織化 *reorganization*、更には超克 *Überwindung* でなければならない。二つの機能は、共に相互補足的関係にある。

だが、歴史的世界が完結することなき生の流動であり、個性的なる一切は、それぞれ存在理由をもちつつも、やがて克服されねばならぬ運命にある以上、教育本来の目的 *primary aim* は、適応 *adaptation* にではなく、革新 *reformation* にあるとみてさしつかえないであろう⁵⁾。しかし、革新といい創造といえども、真空の中で行われることはできない。我の自由、我の確立は、汝との対決から生れ、汝との対決は、汝の受容を前提する。我々是我々の置かれている状況を、我々自身の運命として受けとめることから始めなければならない。では、我々の時代の本質とは一体何であり、また如何なる問題を含んでいるであろうか。

II

過ぐる一世紀を回顧してウェイドレは云う、「かの一世紀は総てのものをもった。しかし、世紀の魂たるべき統一だけはもたなかった⁶⁾」と。まことに、我々は過去の時代が想像もできぬ程の、物質的、精神的豊饒の中にある。それにも拘らず「どこからか空虚な空間の気配がして来」て、「涯しない無の中を迷い渡っているように」⁷⁾感じざるを得ない。思想や方法の不足によってではなく、却って統一なき過剰の故に悩まされている時代、換言すれば、多彩な外見にも拘らず、その内容が無ではないかという不安に脅えている時代、それが偽らぬ現代の姿であろう。

3) Ranke : *Weltgeschichte*. VIII. S. 117—118.

4) Durkheim : *Education et sociologie*. 田辺訳104頁参照.

5) Maritain : *Philosophy and Education*, NSSE year book, 1955, P. 62. 以下の考察もこの立場に拠る。

6) Weidlé : *The Dilemma of the Arts*, 深瀬訳50頁

同様に芸術からみた近代文化論として Sedlmayr : *Verlust der Mitte* 参照。

7) Nietzsche : *Die fröhliche Wissenschaft*, A. 125.

周知の如く、ルネッサンスに始まる近代は、神から離れた自立的人間の歴史であった。だが皮肉にも、人間尊重を呼号した近代の帰結は、却ってさまざまな人間の自己疎外 *Selbstentfremdung*、非人間化 *Entmenslichung* の状況を現出した。その原因は、例えば、特定の政治的、経済的体制の欠陥や、技術の進歩に即応しえぬ文化の遅れ *cultural lag* にあるとみなされ、従って政治的変革や教育的説得による克服の努力が繰り返されて来たのである。しかし、二つの世界戦争は、今や疑いもなく時代の内容が無であることを人々に実感させ、改めて現代の病根が、単に政治的、経済的、道德的問題としてのみ処理し得ぬ深みを持つことを反省させ始めた。即ち、時代の混乱と頹廢の根源は、実にかのニイチエの言葉「神は死せり、*Gott ist tot*」に予言された「最も不気味なる訪問者ニヒリズム」の仕業だったことが明らかとなったのである。そこで、近代克服の問題は、ドウソン、ベルジャエフ、ニーバー等によって宗教的問題として取り上げられ、近代文化の解体现象は、否定的な形に於ける超越への志向とみられた⁸⁾。近代人は「己れの中の最も近い者を殺しておいて、改めてその者を慕う心にあふえ」、隠された神的不満 *divine discontent* の故に、次々に新しい似而非なる神の崇拜、偶像の建立にと走るのである。それ故、我々の時代の根本問題は、ニヒリズムの克服であり、その為に今一度見失われた超越との関わりを取戻すことである。世界の宗教的再生のみが、彼らによれば、究極的に現代の変革と救済を可能にするであろう⁹⁾。

しかし、世界の宗教的再生は、直ちに伝統的な信仰形態への必然的逆行を意味しない。「殺された」神には、「殺した」現代人を克服しかえす力はない。現代を救うものは、これ迄の有神論、無神論をこえた「神なき後に現れる神 *God above God, who appears when God has disappeared*」であり、かかる神への信仰として、信仰無信仰にかかわらぬ或る「絶対的信仰 *absolute faith*」である¹⁰⁾。しかれば、殺された神とは何であり、その結果生れたニヒリズムとは如何なるものであったか。我々はこの問を通じて、神なき後に現れる神の時代を待望し、その時のための準備へと導かれるであろう。

Ⅲ

普通、「神の死」とはキリスト教的神の否定であり、従って、ニヒリズムとは無神論になることだと考えられている。しかし、ニイチエにとって、神とはさまざまな理念と理想の生れる領域を示す名前、価値の源泉としての「超感性的世界一般 *die übersinnliche Welt überhaupt*」のことであった¹¹⁾。感性的なものと超感性的なものとの領域を分け、後者を真に実在的な世界と

8) Dawson : Religion and the Modern State.
 Berdyaev : The End of our Time.
 Toynbee : Civilization on Trial.
 Niebuhr : Faith and History.
 Tillich : Religious Situation. etc. 参照。

9) たとえば Niebuhr : Human Nature and Destiny II. に於ける宗教改革とルネサンスの総合、
 Tillich : Protestant Era に於ける神律的文化の観念参照。

10) Tillich : Courage to Be. pp. 171-190.

11) Heidegger : Holzwege. S. 200.

考える位階的世界図式 Schema der Stufenordnung des Seienden は、プラトン以来ヨーロッパ的思惟の中核を形成してきた。感性的世界を die physische Welt と呼ぶなら、超感性的世界は die meta-physische Welt ・形而上学的世界である。従って、神が死んだということは、全ての実在的なものの根拠 Grund であり目標 Ziel であった超感性的世界が、もはや影響力をもたないということであり、プラトニズムの展開とみなされたヨーロッパ形而上学終焉の宣告であった。

ニヒリズムとはこの根拠と目標の喪失、即ち、従来の「最高の諸価値が価値を失うこと Dass die obersten Werte sich entwerten」¹²⁾ に外ならない。最高の諸価値は、神から道德律、社会的本能、物質的生産へ、彼岸の浄福から歴史の進歩や最大多数者の地上的幸福へと、歴史の過程と共にめまぐるしく変転してきた。しかし、その内容が如何に変わっても、価値と現実の区別をもつ限り、世界そのものの位階的図式はそのままであった。有神論の廃棄は、超感性的世界を空位にただけであり、空位は新しく他のもので補われることを求めるのである。してみれば、ニヒリズム出現の本質的根拠は、かかる位階的図式をもつ世界解釈としての形而上学そのものの中にある。しかも、形而上学の展開と歴史的運動が表裏一体をなすことを思えば、ニヒリズムは実にヨーロッパの歴史の根本過程 Grund-vorgang であり、同時にその内的論理 die innere Logik をなすものであった¹³⁾。ニヒリズムは、現代的な単なる無神論的頹廢現象 Verfallserscheinung ではないのである。

超感性的世界が空位のまま残されている限り、ニヒリズムは絶えず新しい偶像崇拜に転化する。偶像崇拜は、それ自身としての生の否定である。従って、ニヒリズムの克服は、偶像発生根源たる超感性的世界そのものを否定する以外にない。それ故に、来るべき時代を告げる人ツアラーストラは云った。「もし神々が存在するとせば、我如何で自ら神とならざるに堪え得ようぞ？。この故にこそ、如何なる神々も存在しない¹⁴⁾」と。価値定立の領域そのものの変革は、価値の立て方の根本的変革、即ち、「一切の価値の顛倒 Umwertung aller Werte」¹⁵⁾ を意味する。ニヒリズムは、価値の喪失から価値の顛倒に迄徹底される時、初めて完成されると共に克服され、生は再び自己自身を取戻す。今や生そのものが、新しき価値定立の原理である。価値は彼岸から生に対立するものではなく、生の維持—高揚のための諸条件の視点 Gesichtspunkt von Erhaltung-Steigerungs Bedingungen des Lebens となる¹⁶⁾。この視点を決定するのは、生の本体としての力への意志 der Wille zur Macht である。力への意志は、自己自身を意志する意志であり、意志への意志 Wille zur Willen にほかならない¹⁷⁾。それは常に自己自身の主た

12) Nietzsche : Der Wille zur Macht. A. 2, S. 10.

13) Heidegger : Holzwege. S. 206.

14) Nietzsche : Also sprach Zarathustra. S. 91.

15) Nietzsche : Der Wille zur Macht. A. 28, S. 23.

16) Ibid. A. 715, S. 482.

るために、自己自身を超えてゆかねばならないが、しかも、いつも同じ意志として、同じものとしての自己に立ち帰ってくる。力への意志としての生は、自己超越的でありながら自己完結的であり、不断の生成 *Werden* であると共に永劫の回帰 *die ewige Wiederkunft des Gleichen* である。それ故、自己の本質がかかる力への意志から意志されている人間、即ち、永遠に創造的な意志としての超人 *Übermensch*こそ、神なき砂漠の不毛と孤独に堪え、よく「今一度」大地に意義と未来を与え得る者であろう。死せる神々の復活によってではなく、超人の出現に於いてニヒリズムは克服され、人類の未来が開かれる。もし然らば、一切のものはただ超人の産出にあずかることによって、初めてその存在理由を獲得する。教育とは超人を説くことである。超人産出のために、生のあらゆる瞬間に於いて、敢て没落してゆくことを教えるものである。

IV

しかし、超人の出現によって、はたして現代は救われるであろうか。もしニヒリズムが最高の諸価値の価値喪失として受けとられ、力への意志が従来の諸価値を顛倒する新しい価値定立の原理と考えられるなら、力への意志は確かにニヒリズムの克服となるだろう。しかし、力への意志の前に、存在するもの一切が価値の対象として評価され、見積られるということは、既にそのものがそれ自体としてある尊厳さを奪われ、力への意志が自己貫徹するために定立する単なる条件に貶められているということである。その限り、存在するものはその本然の姿に於いてあることを否定され、その根底に於いて無化 *Nichten* されている。してみれば、無条件的な価値定立の原理としての力への意志こそ、却って一切を無化する根元的な殺害者であると云わなければならない。ニイチエはニヒリズムの本質を見誤っていた。ニヒリズムとは、ハイデッガーによれば存在するものがその根底に於いて無化されていること、即ち、存在者をそれ自身たらしめている存在が空しくされ、忘れられていることにある¹⁷⁾。価値定立の原理が神であれ超人であれ、存在するものが価値評価の対象とされるということそのことが、尙この意味で殺害であり、ニヒリズムなのである¹⁸⁾。

しからば、存在の無化を起すという価値評価の本質とは何であるか。価値とは、一切のものがそれに基く尺度、行為の帰着点として、あらかじめ見込まれておかれるもの、視点 *Geschichtspunkt* である。視点たる限り、価値は見ること *Sehen* によって、又見ることのために定立されている。或ものを見るということは、見られたものをそのものとして自己の前に立て来らすという仕方で行われる。この前置的・表象的定立 *vor-stellendes Setzen* によって、初めて何ものかを目指すに必要な、そしてこの眼差の方向を導くところの点が、視点となるのである。してみれば、価値定立と表象することとの間には、不可分の関係がある。評価することは見ることに基き、見ることは前に立てること・表象に連るからである。

17) Heidegger : *Holzwege* : S. 216—217.

18) Ibid. S. 244.

19) Ibid. S. 53.

表象 *Vorstellung* は、「現前するものを自己に対立するものとして自己の眼前に持ち来り、かく眼前に持ち来らされたものをそのものとして自己に向って確保する」ことである。そこでは、自己に向って立て来らす人間 *vorstellende-herstellende Menschen* と、その人間によって立てられている限りに於いて存在する世界とが対立する²⁰⁾。表象するとは、従って二つの根源的来事、即ち、人間が立て来らす主観・主体 *subjectum* となり、世界が主観に表象された単なる世界像 *Weltbild* に転化することを意味するだろう。しかも、表象が「こちらから向うへ、向うからこちらへ定立する *das von sich hin und zu sich her Stellen*」²¹⁾ という構造をもつ以上、それは結局自己から出て自己へ帰る主体の自己肯定に外ならない。人間によって立てられた世界は、既に人間の見積り *Berechnen*, 作成 *Herstellen* が加えられた世界である。表象するとは、先行的・操作的に支配せんとして対象すること *vorgehende meisterende Vergegenständlichung* である²²⁾。従って、表象化され像となった世界は、自己を肯定し貫徹せんとする主体の作成の単なる素材に過ぎず、その本然の姿を完全に否定されてしまっている。してみれば、人間が表象する主観となったということの中に、既に人間をも含めて存在するもの一切が殺害され、無化される原因があったと云えるのではなかろうか。

ニヒリズムの本質を、存在するものの存在が無化されること、存在の忘却 *Seinsvergessenheit* とみるなら、ニヒリズムの根源は表象作用の中に、即ち、主観—客観関係に於いて対象化する思考法にまで溯らなければならない。その時、ニヒリズムの克服は、死せる神々の復活でも超人の出現でもなく、ただ思考法の根元的転回、表象的・対象化的思考の突破によってのみ、可能となるであろう。現代に必要なことは、何よりも思考法の転回である。だが、その転回は、何処に向って、また如何になさるべきであるのか。

V

ニヒリズムが存在の忘却であるという場合、その存在とは存在するものの本質、或いは第一原因の如きものではない。本質や原因は「存在するもの *das Seiende*」であって「存在 *Sein*」ではない。存在忘却とは、この存在するものと存在との区別の忘却 *die Vergessenheit des Unterschiedes des Seins zum Seienden* ²³⁾ であり、その結果、存在するものにのみ執着することである。

存在は存在者と異なる以上、我々の理解を完全にこえている。それにもかかわらず、存在についての何らかの理解があればこそ、我々はさまざまな存在者をすべて存在するものとして肯定し、それとの交渉の中に生きているのである。我々は存在するものをそのものとして問題にすることによって、不知不識の中に存在に接している。してみれば、存在とは比喩的に、存在するものが

20) Heidegger : *Holzwege*. S. 83.

21) *Ibid.* S. 85.

22) *Ibid.* S. 100.

23) *Ibid.* S. 336.

そこで姿を現し、我々がそれと出会っているところの明るみ *Lichtung* そのもの²⁴⁾、開け *Offenheit* そのものであると云えよう。明るみは眺め *Anblick* を保証するが、決して眺めやり *Hinblick* の対象となることはない。従って、存在は我々にとって、全ての存在者より更に遠いのであり、しかも如何なる存在者よりもっと近いのである。²⁵⁾

元来、形而上学は存在者をこえて (*meta=über*) 問い出るものであり、その限り存在者の存在を思考するものであったが、実際には、それを存在者の存在者性 *Seiendheit* として対象的に思考したために、結局存在者の存在者を問うことにとどまってしまった²⁶⁾。対象化的思考の開始と形而上学の成立、及び存在の忘却とは同時的である。しかも、対象化的思考の本質は、主体の自己肯定であるから、やがて形而上学的世界は否定されて生の自己肯定が始まり、人間は神を殺して自ら世界支配にと反逆せざるを得なくなる。このように考えると、形而上学の否定は形而上学の発生と同じく対象化的思考の必然的帰結であって、その限り形而上学の完成であり、存在忘却の完了であるにすぎない。

それ故、ニヒリズムという時代の病は、ニヒエ的な形而上学の顛倒によってではなく、却って形而上学の根底に帰ってゆくこと *der Rückgang in den Grund der Metaphysik*、即ち、これまで無自覚の中に前提されながら、遂にそれとして一度も思考されたことなく忘却されてきた存在そのものを回想し *Andenken an das Sein selbst*、それとの正しい関わりを恢復することによってのみ、克服されるであろう。思考を存在するものから存在へ転回し、存在の思考を通して存在への帰郷 *Heimkunft* をなすことこそ、我々の時代の課題であり、従ってまた、我々の教育の課題なのである。

VI

だが、思考を存在に転回するとは如何なることか。「存在の思考 *das Denken des Seins*」とは何を意味するのか。

存在の思考という場合、我々は所有格の「の」を二重の意味に於いて解さなければならない。存在の思考は、一方において、存在が思考を所有するということ、思考が存在に帰属することである。それは存在「が」我々の思考「を」惹き起し、我々に思考させるということに外ならない。しかし他方、思考は存在に属しながら *gehörend*、しかも存在に耳を傾ける *hören* ものとして、その限り我々「が」存在「を」思考することである。従って、存在の思考とは、存在が思考することであると共に存在を思考することである。我々の求める思考は、存在に聴きつつ所属すること *das hörend dem Sein gehörend* であり、思考を存在そのものから生起させることである²⁷⁾。

24) Heidegger : *Über den Humanismus*. S. 20.

25) *Ibid.* S. 19.

26) Heidegger : *Was ist Metaphysik?* S. 44.

“ : *Über den Humanismus*. S. 20.

27) Heidegger : *Über den Humanismus*. S. 7.

思考は、近代人にとっては、表象し対象化することであって、結局力への意志としての主体が自己実現するための技術、道具となっている。しかし、古代ギリシヤでは、存在するものは自らを顕わにしつつ立ち現われるもの *das Sichoffende und Aufgehende* であり、人間はかかる存在者によって出会われ、観られたもの *der von Seienden Angeschaut* として存在した²⁸⁾。従って、ものを知るということは、人間がものを観るというよりは、ものが自己開示するが故に人間が観させられるということに基き、思考はむしろものから来ったのである。存在の思考は、近代的な思考の技術化から思考の古代的要素を救済するものである。それはただ「人間の本質に対する存在の関係を完成する *vollbringen*」ものであって、この関係を作ろうとするものではない²⁹⁾。

存在は如何なる思考の産物でもない。むしろ、全てに先立つ無名の「それ」として、存在が自己を与えるが故に、存在するものがある *es gibt das Seiende* のである。従って、存在者があるということは、謂わば存在の贈物 *Geschick*、愛顧 *Huld* であり、恩恵 *Gunst* である。存在者がその贈与にふさわしく *geschicklich* あろうとなかろうと *ungeschicklich*、存在の贈与 *Geschick* を離れて存在者はあり得ない。そして、我々が本質的に存在の贈物の上に結びつけられ、投げかけられているということは、我々が本質的に存在から呼びかけられていることになる。存在の *Wurf* は存在の *Ruf* として来る。存在は、謂わば音なき声として、我々の本質に語りかけている。それ故に古人も云った、「^{はじめ} ^{ことば}太初に言ありき・・・ ^{よろず}萬のものこれに由りて成り、成りたるもの一つとしてこれによらで成りたるはなし」と³⁰⁾。存在は言 *Wort* である。存在の思考は、存在の音なき声の言に対する人間の答え *die menschliche Antwort auf das Wort der lautlosen Stimme des Seins* であり、「存在の恩恵の反響 *der Widerhall der Gunst des Seins*」であって、その基調に於いて存在への感謝 *Danken* である³¹⁾。

而して、存在の語りかけに「対して」答える *ant-worten* ということは、その語りかけに「応じて」云う *ent-sprechen* こと、即ち、存在の言に従順に ^{ことば}*gehorsam* 聴従し *gehören*、存在の語るがままを人間の言葉 *Sprache* にもたらしということである。従って、存在の思考とは、存在の言を求め、この言を現す言葉の使用に心を配ること *die Sorge für den Sprachgebrauch* である云うことができよう³²⁾。存在の思考の中で存在は言葉となり、言葉は存在がそこに住む家となる。

言葉が存在の家 *das Haus des Seins* であるならば、かかる言葉を見出し、語り、守って生きることは、とりもなおさず存在がそこに現成することであり、存在への帰郷がなされることである。時代の転換は、意外にも言葉の中に起る。我々は言葉を単に伝達の道具とみ、言葉をもつということのを他の能力をもつと同じように考えている。だが、言葉の本質は人間の道具ではな

28) Heidegger : *Holzwege*. S. 83—84.

29) Heidegger : *Über den Humanismus*. S. 5.

30) ヨハネ伝 福音書 : 1・1—3

31) Heidegger : *Was ist Metaphysik?* S. 49.

32) Heidegger : *Vorträge und Aufsätze*, S. 129, 182. *Was ist Metaphysik?* S. 50.

い。存在の家である。言葉は、存在するものを存在するものとして、明るみの中に出す。言葉の中で、我々は存在するものと出会っている。言葉に於いて、存在は明るく人間に到来し、人間は存在に帰入する。人間は言葉に於いて「在る」。その限り、「言葉は存在の家であると共に、人間本質の住居 *die Behausung des Menschenwesens* である」³³⁾。而して、言葉の中に住むところこそ人間の本質であるなら、言葉の破壊は人間の破壊であり、言葉の救済は人間の救済である。もし然らば、言葉を再び存在の家たらしめるために思考し、語り、守る者こそ、現代を救済する者であり、教育する者であるといわなければならない。

VII

恐らく、我々の時代の教育者が存在の思考に生きる人間であり、言葉の使用に心を砕く者、謂わば詩人的に生きる人間であるという時、何人も意外の感にうたれて次の如く反問せざるを得ないだろう。教育 *Bilden* とは、文字通り像 *Bild* を通じて刻印し *prägen*、誘導する *geleiten* こと、規範的な眺めにあらかじめ合せて造ること *aus der vorgreifenden Anmessung an einer massgebenden Anblick bilden* であって、その限り確固たる模範像 *Vor-bild* を必要とする³⁴⁾。我々に今必要なものは、この動いて止まぬ歴史的生の流れを一定の枠に流し込み、形成してゆくための具体的な規範、倫理である。しかるに、この危機の時代にあって、存在や言葉に心を煩わすことが、一体幾許の意味をもつのか。それこそ非生産的な閑談、生の浪費に過ぎないのではないか、と。

では、存在の思考に沈潜し、言葉の使用に心を砕くということは、この歴史的現実の中にあって如何に生きることを意味するのか。言葉が存在の家であり、言葉の中に人間が住むということは、言葉に於いて人間が存在の明るみの中に出で立つことである。存在の明るみの中で存在者はその覆いを取り、自己を顕わに開示する。しかし、明るみそれ自らが存在であり、存在者の自己開示、出現は、同時に存在の贈物・運命 *Geschick* として、存在そのものから生起する。従って、存在者の自己開示としての歴史 *Geschichte* は、その根底に於いて存在の運命 *Geschick* の生起 *Geschehen* であると云わなければならない³⁵⁾。しかも、明るみ *Lichtung* は開け *Offenheit* であり、この存在の開けが世界 *Welt* であるから³⁶⁾、人間は言葉に於いて世界の中に立ち、また世界に於いて廻り会う運命としての歴史をもつのである。それ故、存在の声に聴きつつ語るということは、歴史的現実から遊離することではなく、却って世界の中に立ち、そこに現

33) Heidegger : *Über den Humanismus*. S. 45.

言葉をめぐる思考と詩作 *Dichten* の関係については次に述べたい。

Heidegger : *Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*. 参照

34) Heidegger : *Platons Lehre von der Wahrheit*. S. 24—25.

35) Heidegger : *Über den Humansimus*. S. 23.

36) *Ibid.* S. 35.

Heidegger : *Hölderlin und das Wesen der Dichtung*. S. 7.

われる運命に相応しく語ることとして、それ自体歴史的な行為であると云わなければならない。その都度、歴史的にただ一つのこと、即ち、そのことがら自体に合った発言がなされるということが、思考が真に存在に属していることなのである³⁷⁾。

してみれば、存在の思考をなすということは、我々が想像するような、何か特別な、稀有なことではないだろう。むしろ、存在の思考の不思議さは、その単純さ *das Einfach* にある³⁸⁾。非凡な生活、感動的な教訓を期待してヘラクレイトスを訪ねた人々は、パン焼窯の傍にうづくまる貧しい彼をみて失望した。それに対してヘラクレイトスは云ったという、「ここにも又、神々は在す³⁹⁾」からと。存在を思考し、語るということは、非凡な生活をなすということではない。日常的な生活を日常的な生活として、平凡に生きることである。しかし、平凡に生きるということとは、直ちに無為に生きることではない。平凡さが平凡さとして贈られてくる存在の明るみを醒めて守って生きることである。人間が人間として住む開かれた場所を守っている限り、功勞 *Verdienst* の如何にかかわらず、人は神の近きに住む。だが、何故に、人々が物狂わしく求めつつ見出し得ぬ神が、究極の救済 *Heil* が、却って功勞なき平凡な住いに宿るのか。何人も未だ神を知らない。しかし神は、神性 *Gottheit* の輝きの中にその姿を顕わすだろう。神性の輝きは、聖なるもの *das Heilige* の次元が開かれるところに現れる。聖なるものの本質は癒しである。癒す *heilen* ものは健全なもの *das Heile* であり、健全さは損われざることである。損われざるものは、ただ存在の明るみの中にのみ保持される。してみれば、我々が存在の明るみに住うかぎり、即ち、人間として生きる限り、何処でも *<auch hier nämlich>* 神々は在す *<wesen Gotter an>* と云わなければならない。そして、人間の住い *Aufenthalt* がエートス *ηθος* の原義であるとすれば、存在の明るみを守ること、即ち存在の思考に生きるとは、それ自体、諸々の倫理に先立つ根源的な倫理 *die ursprungliche Ethik* なのである⁴⁰⁾。

このように考えると、これまでの我々の生き方は、根本的に方向が逆だったことがわかる。我々は最高の存在者を求めて、高く、遠く昇りゆくことが救済への途であり、倫理的行為だと考えてきた。しかし、まことの救済は、却って下へ下へと降りつつ、「最も近きものの近さへと沈潜してゆくこと *zurücksteigen in die Nähe des Nächsten* ⁴¹⁾」にあったろう。人間の居所を忘れて性急に神を求めることなく、却ってそれを守りつつ神の到来を待つべきであつたろう。人間の幸福は、「存在するものの主人 *der Herr des Seienden*」となることではなく、存在の明るみに住い、これを守る「存在の牧者 *der Hirt des Seins*」⁴²⁾ たることにあつたろう。人間たるの品位 *Würde* は、存在自身から存在の明るみを守るよう呼びかけられていることにあり、彼の使命は、それに応えて存在の明るみの中に出で立ち *ek-sistieren*、存在するものがあるがま

37) Heidegger : *Über den Humanismus*. S. 23, 42.

38) Ibid. S. 46.

39) Ibid. S. 39.

40) Ibid. S. 39, 41.

41) Heidegger : *Über den Humanismus*. S. 37.

42) Ibid. S. 29

まにそのものとして現れるように、存在の明るみを守ることだったのである⁴³⁾。

しかし、このような生き方の転回は、決して容易なことではない。特に人間の本質が主体となった現代にあって、下降は上昇よりも更に難しく、危険である。彼が存在の明るみを守るべく呼びかけられていること Ruf の自覚は、彼が存在の投げ Wurf によって存在の明るみに投げられていることの自覚に対応する。存在の声を聴くためには、まづ彼は自己の根源的被投性 *Geworfenheit* を自覚し、自己の企投性に対する根強い自負を棄て去らねばならない。存在の思考は、自己に対する全き謙虚さと、自己を投じたものに対する畏敬 *Scheu* の上のみ可能となる⁴⁴⁾。存在の牧者の品位を得るためには、存在者の主人たることを犠牲にして、全き貧困 *Armut* にも堪えねばならない⁴⁵⁾。存在の声に従順なるためには、他の全てを敢て犠牲にする勇氣 *Opfermut* をもたなければならない⁴⁶⁾。その限り、存在の思考に生きることが、単なる閑談であり得ぬことは云うまでもなからう。

存在の思考は、理論的でも実践的でもない。それは存在の回想であって、それ以外の何ものでもない。従って、直接的には如何なる成果も結果も生まない。それにもかかわらず、この思考がなされるところにのみ存在は光り、存在するものがその姿を隠れなく開示し、世界が開け歴史が歴史する。この思考が失われるとき、事物はその本然の姿を隠し、世界と歴史は偶像的な神か超人の下に吸収され、無化されてしまう。してみれば、存在の思考は単なる生の浪費ではなく、却って一切の生の充実がそこに可能となるところの、不可欠な根源的浪費だと云わなければならないまい。

VIII

教育を形成 *Bilden* とみる限り、明確な理想像が必要である。しかし、教育の場は、生の聯関としての歴史的世界である。そこには、何人も明確かつ一義的な意義や方向を見出すことはできない。一切の關係は、不斷の我と汝の相互限定の結果であり、従って、一時的、相対的である。すべてが相対的であるとき、そこに支配する唯一の法則は、スタヴローギンの命題「一切は許されている」である。その時「この世界は力への意志であり、それ以外の何物でもない」。従って、歴史的世界に於ける我と汝の關係は、力の闘争を内蔵した均衡であり妥協に過ぎない。両者は、本質的に、いずれか一方が無化されることなしには結合し得ないのである⁴⁷⁾。このような状況の下で、何らかの像への一義的形成を行えば、例えそれがどのような形をとるにせよ、本質的には教育する者の一方的な自己主張であり、自己満足である。その時、教育は人間の人間による飼育に過ぎない。

43) Heidegger : Über den Humanismus. S. 19

44) Ibid. S. 29

Heidegger : Was ist Metaphysik? S. 47

Heidegger : Vorträge und Aufsätze. S. 130.

45) Heidegger : Über den Humanismus. S. 37

46) Heidegger : Was ist Metaphysik? S. 50

47) Lawrence : Apocalypse. p. 221.

しかし、飼育される人間にとっては、遠い将来の一点で尊重されるより、貧しくとも今此処で自分であることを希うだろう。我々は世界が結局力への意志であるというニイチエの洞察の正しさを認めぬわけにはゆかないが、それにもかかわらず、力への意志の前にすべてが手段化されることに我慢出来ない。自ら進んで天国の鍵を返し世界の無秩序を認めたとしても、猶我々は「自分にとって足下に萌え出る青草が、紺碧の空が、ゆきずりの人間がそのままに尊い」ことを、「生の意義以上に生そのものを愛する⁴⁸⁾」ことを告白せざるを得ないのである。しかし、この「知識も論理もこえた」深い生への愛と畏敬は、一体何に基くのか。恐らくその謎は、「あらゆる存在者の中で、ただ人間のみが体験する奇蹟中の奇蹟」⁴⁹⁾、即ち「何故に一体存在するものがあって、却って無ではないのか Warum ist überhaupt Seiendes und nicht vielmehr Nichts?」⁵⁰⁾ということに想いをひそめるとき、初めて開かれて来るだろう。存在するものは、そのものをそのように明らめている明らみが気づかれるとき、新しく意義を獲得するだろうし、我と汝が共に立つ開けが輝いてくるとき、両者の関係にはこれまでと違った創造性が生れてくるだろう。そして、教育 *paideia* の本質は、実はプラトンの洞穴の比喻に明らかな如く⁵¹⁾、事物の本質の隠された場所から、隠れなく顕われた場所に慣れ変ること *die eingewöhnende Versetzung in einen Bereich, darin das Seiende selber erscheint* であり、人間全体を存在の開けの覚醒 *Erwecken* へと転回すること *die Umwendung der ganzen Menschen* にこそあったのである⁵²⁾。

恐らく、我々の時代ほど教育がやかましく論ぜられながら、その実軽蔑されている時代はあるまい。教育は益々、力への意志の現実態としての政治や技術の下請作業に充足しつつある。教育は、既にそれ自体としての意義と尊敬を失ってしまっている。この原因は、教育に於ける形成の側面のみが強調されて、覚醒の側面が忘却されてしまったからであろう。*Erwecken* を忘れた *Bildung* は、畢竟＝ヒリズムであり、人間疎外を助長するだけである。存在への覚醒と、その開けに現れる具体的理想への形成が結合してのみ、教育本来の働き、即ち人間を人間たらしめることが可能となる。してみれば、我々の教育の根本問題が、忘却された覚醒の側面を恢復し、これと具体的形成とを如何に関係づけるかという点にあることは明白である。その時、あまりにも性急に教えたがる教師達から離れて、唯一人ラビの称えを受けることもなく、存在を思考し、言葉を存在の家たらしめようと努力する人間が、一見無縁にみえようとも、我々の時代にとって不可欠な教育的存在であることは云うまでもなからう。

48) ドストイェフスキイ：カラマゾフの兄弟。中山訳。2巻 146—148頁。

49) Heidegger : Was ist Metaphysik? S. 46.

50) Ibid. S. 42.

51) Plato : The Republic. VII. 514.

52) Heidegger : Platons Lehre von der Wahrheit. S. 25.

Jaeger : *Paideia*, translated by G. Highet, p. 291—300. 参照。

洞穴の比喻に於ける教育の本質とその変化は、存在がイデアとみなされたことに基く真理 *ἀλήθεια* の本質の変化と相関的に考察されねばならない。(Platons Lehre von der Wahrheit. S. 23—46.) また、ことば *Wort* の問題はロゴス *λόγος* の問題である。存在するすべてのものに共通な構造 (Tillich : Love, power, justice. p. 18) を発見し、それを媒介とすることによつて、はじめ積極的な生の形成が可能となり、教育的世界の構造も明らかとなる。これらについては次に述べたい。